

子どものスポーツ活動への親の意識に関する研究

A Study on the Consciousness of Parents about the Sports Activities of their Children

次世代教育学部こども発達学科

小倉 晃布

OGURA, Akinobu

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

体育学部健康科学科

早田 剛

HAYATA, Gou

Department of Health Science

Faculty of Physical Education

体育学部体育学科

長谷川 晃一

HASEGAWA, Koichi

Department of Physical Education

Faculty of Physical Education

要旨：2020年の東京オリンピック開催に伴い、国民全体のスポーツ参加への気運が高まり、スポーツ系の習い事を始める子どもたちも多い。子どもたちの親は、自分たちの子どもをスポーツ系の習い事に通わせることで、技術の向上、教育的効果を期待していることがこれまでの先行研究によって明らかになっている。しかし、スポーツ系の習い事を提供する側と、それを享受する側の目的や意識が合致しているかどうかを調査した研究は見当たらない。そこで、本研究では「IPUスポーツサークル」に通う小学生の保護者が、どのような目的、意識をもって、習い事に通わせているのかを明らかにするとともに、その目的、意識が習い事を提供する側（指導者）と合致しているかどうかを明らかにする。

キーワード：スポーツ系の習い事、親の期待、意識調査、IPUスポーツサークル

I. はじめに

近年、世界における日本人アスリートの活躍がめざましい。野球ではメジャーリーグ、サッカーでは欧州リーグで活躍する選手が年々増えてきている。また、昨年リオデジャネイロで開催された第31回オリンピック競技大会において日本が獲得したメダル数は合計41個（金12個、銀8個、銅21個）と、過去最高のメダル数を獲得したことから見ても、日本人アスリートの世界での活躍ぶりがうかがえる。

このような日本人アスリートの活躍の背景には、子どもたちのスポーツ参加の増加が挙げられることに異論はないであろう。子どもたちのスポーツ参加とは、地域のスポーツイベントへの参加やスポーツ系の習い事、学校の部活動など、様々な形態が挙げられる。特に、日本人アスリートが活躍するスポーツ種目の習い事は人気が高く、世界で活躍する日本人アスリートに憧れてそのスポーツ種目を習い始めるという子ども

ちも多い。それはスポーツ種目の競技人口の増加に繋がり、その中から新たに世界で活躍するアスリートが生まれるという好循環を生み出している。

Benesse教育研究開発センター（以下、ベネッセ）が2007年に実施した「第4回学習基本調査報告書」（ベネッセ教育総合研究所，2007）によれば、10年前の1996年の小学生のスポーツ系の習い事の割合は、男女ともに「スポーツ」の割合が10ポイント以上も増加している。

また、「第5回学習基本調査報告書」（ベネッセ教育総合研究所，2015）では、1990年から2015年までの小学生の習い事の種類を経年比較を示している。1990年から2015年まで小学生の習い事における「スポーツ」の割合は最も高く、1996年以降増加を続けている。2015年の習い事における「スポーツ」の割合は56.2%を示しており、1990年の43.5%から10ポイント以上増加している。

このように、スポーツ系の習い事を始める子ども

増加について、渡辺らは「子どものスポーツ参加に投資をする親が増えてきた」と、子どものスポーツ参加に対する親の期待が高まっていることを指摘し、「子どもに対する親の関与が年々強まっている現状がある」ことを報告している（渡辺ら，2014）。スポーツ活動の参加には、用具の購入、送迎、遠征の旅費など、親が援助しなければ成り立たない要素が多い。それを踏まえると、子どもたちのスポーツ参加への気運が高まることは、親のスポーツに対する期待が高まることと同じであると解釈できよう。それと同時に、渡辺ら（2014）が指摘するように「教育不安が高まり、子どもへの関与が年々強まっている現状を考慮すると、どのようなことにでも介入してくる親の存在が、現在の日本の社会を反映している」と言えるだろう。このような親の存在は時にはトラブルの種になることもあるかも知れないが、子どものスポーツ活動の参加においては、とても重要な存在である。では、スポーツ活動に参加する子どもの親は、自分の子どもが行うスポーツに、どのような期待をもっているのだろうか。

子どもをスポーツ系の習い事に通わせている親を対象とした意識調査の研究は数多く見られる（岡田，1977；小松，1992；ベネッセ教育総合研究所，2009；渡辺，2014）。これらの多くは、「スポーツをすることに対する親の期待」や「スポーツ系の習い事にかかる費用、日数、負担」、「それぞれのスポーツクラブ（教室）の運営に対する満足度」をアンケート調査によって明らかにしている。その中で「スポーツをすることに対する親の期待」として多く挙げられていたのは、「スポーツを楽しむこと」や「人間的に成長すること」、「目標を見つけて頑張ること」など、そのスポーツが上手になることよりも人間教育的な効果を期待することが多かったことが述べられている。しかし、アンケート調査によって親の意識や期待内容を明らかにしてはいるものの、その内容がスポーツ活動を提供する側、つまりはスポーツクラブの運営方針や指導者の意図、目的と合致しているかどうかを考察している研究は見当たらない。

筆者は、本学において「IPUスポーツサークル」（以下、スポーツサークル）という小学生の児童を対象としたスポーツ活動を実施しており、この活動には15名の児童が参加している。スポーツサークルでは、器械運動（マット・とび箱・鉄棒）を中心に活動しており、活動方針として小学校学習指導要領（文部科学省，2008）に示される技は、この活動内で児童に習得

させたいと考えている。また、より難しい技に挑戦することも目指している。このような活動方針をもつスポーツサークルというスポーツ系の習い事に対して、15名の児童の親は、それぞれ何かしらの期待や意識をもっていると考えられる。

Ⅱ. 研究目的

本研究では、スポーツサークルに子どもを通わせている親を対象にアンケート調査を行い、子どもたちの親が本学のスポーツサークルに対してどのような期待をもっているのかを明らかにする。同時に、スポーツ活動を提供する側とスポーツ活動に参加する側の期待、意識が一致するのかどうかを明らかにすることも目的とする。

Ⅲ. 方法

1. スポーツサークルの概要

本研究の対象となるスポーツサークルについて、その概要を説明する。スポーツサークルは、本学の体育学科を主部門とする地域貢献活動であり、筆者は昨年度よりこの活動の責任者として従事している。スポーツサークルの活動の詳細は以下の通りである。

- ・活動日時：毎週土曜日12：30～14：00
- ・活動場所：本学第1キャンパス第1体育館
- ・参加人数：小学生児童15名（1年生：2名，2年生：2名，3年生3名，4年生：1名，5年生：4名，6年生：3名）
- ・指導者：筆者（指導歴7年）と体育学科講師（指導歴8年）の計2名
- ・学生スタッフ：本学学生の有志者5～8名
- ・実施内容：主に器械運動（マット・とび箱・鉄棒・平均台・トランポリン）、ボールゲーム、なわとび・フラフープを使った運動遊び など

2. 調査方法、調査期間

本研究では、スポーツサークルに通う児童15名の親（14名）に対して、Googleフォームを使用しURLを配信し、アンケートの回答を依頼した。なお、回答にあたっては調査の目的と回答結果の取り扱いについて説明し、了解を得られた場合のみ回答するという方式をとった。また、児童の親はスポーツサークル入会時に「個人情報に関する同意書」を提出している。調査期間は、2017年7月29日（土）～8月5

日（土）の1週間とした。

3. 調査項目

アンケート調査の項目は以下の通りである。

- 1) 回答者の属性（父親，母親，父親+母親）
- 2) スポーツサークルに通う子どもの学年
- 3) 活動に対する現在の満足度
- 4) 保護者から見て良かったと思う活動内容
- 5) 子どもから見て良かったと思う活動内容
- 6) スポーツサークルの活動に対しての意見
- 7) スポーツサークルの活動に期待すること

なお，7) スポーツサークルの活動に期待することに関する項目には，ベネッセが実施した「第1回学校外教育活動に関する調査」（ベネッセ教育総合研究所，2009）における「5. 子どもの活動に対する親の期待」の質問項目を援用した。

4. 分析方法

主な分析方法は，各項目の単純集計およびクロス集計，ならびに親の属性を説明変数，それぞれの質問に対する回答項目を目的変数としたクロス分析を行った。

IV. 結果および考察

1. 回答者の属性について

今回のアンケートの回収率は85.7%（14名中12名）であった。図1は今回のアンケート回答者の属性を示したものである。回答者は，母親66.7%，父親16.7%，母親+父親16.7%と，母親による回答が最も多かった。これまでに実施されている親の意識調査の多くは「保護者（母親・父親・その他）」を対象に実施されているにも関わらず，その回答者のほとんどが母親であることが報告されていた。今回のアンケートにおいてもそれと同様の傾向が見られた。

2. スポーツサークルの活動に対する現在の満足度

表1は，スポーツサークルの活動に対する親の現在の満足度を示した。全体としては「とても満足」が50%，「満足」が50%と同数であった。また，父親の満足度は「とても満足」，「満足」ともに同数であったが，母親の満足度では「とても満足」62.5%，「満足」37.5%と，「とても満足」の回答が多かった。母親+父親の回答数（n）は合計で2だったが，「とても満足」の回答はなく，「満足」の回答のみであった。

3-1. 親から見て良かったと思う活動内容

表2は，親から見て良かったと思うスポーツサークルの活動内容の数値を示している。この質問項目の回答に関しては複数回答であるので，得られた全体の回答数は33であった。その中で回答数が多かった項目は，マットが30.3%（1位），トランポリンが27.3%（2位），とび箱が18.2%（3位）という結果となった。

先述したように，スポーツサークルの活動方針は学校体育の技を習得すること，そしてさらに難しい技へ挑戦することでもあるので，小学校体育の器械運動領域で練習するマット，とび箱，鉄棒を練習することへのニーズは高いと考えられる。

また，トランポリンに関しては学校体育で練習する

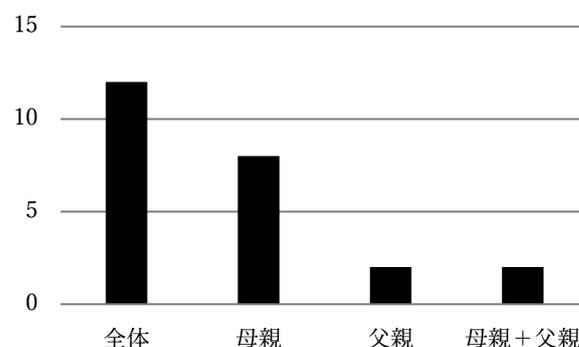


図1. 回答者の属性と人数
(縦軸は回答数)

表1. スポーツサークルの活動に対する現在の満足度

	母親		父親		母親+父親		全体	
	%	(n)	%	(n)	%	(n)	%	(n)
とても満足	62.5%	5	50.0%	1	0.0%	0	50.0%	6
満足	37.5%	3	50.0%	1	100.0%	2	50.0%	6
不満	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0
とても不満	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0
合計	100.0%	8	100.0%	2	100.0%	2	100.0%	12

機会はほとんどない。そのため、普段から触れる機会のない種目だからこそ、非日常的な体験を子どもたちができるといことが親の目線から見ても「良かった」と感じられる要因であると考えられる。

3-2. 子どもから見て良かったと思う活動内容

表3は、子どもから見て良かったと思うスポーツサークルの活動内容の数値を示している。同様に複数回答であるため、得られた全体の回答数は29であった。回答数が最も多かった項目は、トランポリンの31.0%（1位）であり、次いでマットの20.7%（2位）、とび箱の13.8%（3位）という結果であった。実際に指導している筆者から見ても、子どもたちは普段なかなか触れることのできないトランポリンに興味津々であり、トランポリンの活動を非常に楽しんでいる様子であった。

器械運動の特性の1つとして「非日常的驚異性」がある。三木（2006）は「多くのスポーツが日常的な走、跳、投、捕、打などの動きから発展してきた運動に対して、器械運動の技は、逆さまになったり、ぶら下がって回転したり、手で支えて跳び越したり、日常的に必要なでない巧技的な動きであり、人々を驚かせるような運動形態をあえて身につけようとするところにある」と述べている。この意味からしてもトランポリンは器械運動の特性を存分に味わえる種目として子どもたちの評価が高かったと考えられた。

3-3. 親と子どもの意識の比較

表2, 3を見てもわかるように、親と子どもそれぞれに「良かった」と思われる活動内容は「マット」, 「とび箱」, 「トランポリン」が上位3つを占める結果

表2. 親から見て良かったと思うスポーツサークルの活動内容

	%	(n)
マット	30.3%	10
トランポリン	27.3%	9
とび箱	18.2%	6
鉄棒	12.1%	4
ボール遊び	9.1%	3
平均台	3.0%	1
鬼ごっこ遊び	0.0%	0
合計	100.0%	33

となった。親にとって「良かった」と思われた種目は「マット」が最も多く、子どもたちにとっては「トランポリン」が最も多かった。子どもたちは実際にトランポリンを体験しているからこそ、トランポリンの特性、楽しさに触れている。しかし、親は実際にトランポリンを体験していないために子どもたちほど評価は高くなかったと考えられる。

また、親にとっての1位は「マット」であることを考えると、学校体育において「前転」や「後転」, 「側転」が求められることから学校体育における最低限の技はスポーツサークルで身につけさせたい、という親の意識がアンケート結果に表れていると考えられる。

4-1. スポーツサークルの活動に期待すること

表4は、親がスポーツサークルの活動に期待することのアンケート結果を示している。この質問項目においても、回答は複数であるため、得られた回答数の合計は58であった。その中で最も回答数が多い項目が「からだを動かすことを楽しむ」（15.5%）であり、続いて「人に対する礼儀やマナーを学ぶ」（12.1%）, その次に「じょうぶで健康なからだになる」と「自分の得意なことを伸ばす」が10.3%で並ぶという結果となった。

逆に、「リーダーシップを身につける」, 「大会や記録会で良い成績をあげる」については得られた回答はなかった。この回答結果を考えると、この両方の内容に関するスポーツサークルへの親の期待はほとんどないと言ってよいであろう。

スポーツサークルではボールゲームと称して団体競技に繋がる運動も行うが、主として器械運動の練習を実施している。器械運動は個人が対象となるスポーツ

表3. 子どもから見て良かったと思うスポーツサークルの活動内容

	%	(n)
トランポリン	31.0%	9
マット	20.7%	6
とび箱	13.8%	4
鉄棒	10.3%	3
ボール遊び	10.3%	3
平均台	6.9%	2
鬼ごっこ遊び	6.9%	2
合計	100.0%	29

表4. スポーツサークルの活動に期待すること

	%	(n)
からだを動かすことを楽しむ	15.5%	9
人に対する礼儀やマナーを学ぶ	12.1%	7
じょうぶで健康なからだになる	10.3%	6
自分の得意なことを伸ばす	10.3%	6
自分の目標に向かって努力する	8.6%	5
仲間と協力する姿勢・チームワークを学ぶ	6.9%	4
ものごとに集中する力を身につける	6.9%	4
自分のことを自分でできるようにする	6.9%	4
運動に対する苦手意識をなくす	6.9%	4
よく考えて行動できるようにする	5.2%	3
ストレス解消や運動不足の解消	3.4%	2
勝つよるこびや負けるくやしさを学ぶ	3.4%	2
選手としての技術が上達する	1.7%	1
トップレベルの選手をめざす	1.7%	1
リーダーシップを身につける	0.0%	0
大会や記録会で良い成績をあげる	0.0%	0
合計		58

種目であるため、団体におけるリーダーシップなどはなかなか身につけにくいと考えられる。また、スポーツサークルではスポーツの大会などに出場することを目的としておらず、その点に関しては入会時に保護者にも説明している。そのため、「大会や記録会で良い成績をあげる」ことに対する親の期待がなかったことについては、スポーツサークルの目的に準じた結果となった。

4-2. 指導者の意図とスポーツサークルの活動に対する親の期待

本項では、スポーツサークルの活動に対する親の期待とスポーツサークルの活動方針、指導方針、目的を比較しながら親の期待と活動の意図が合致するかどうかを考察していきたい。

まず、スポーツサークルの活動方針として、先述したように「学校体育の技を習得すること、そしてさらに難しい技へ挑戦すること」がある。そのため、小学校学習指導要領解説体育編（文部科学省，2008）に記載されている技は子どもたちに習得させたいという思いをもっている。つまり、マット運動においては「前転」、「後転」から始まり「側転」や「倒立前転」、さらに「伸膝後転」や「ロンダート」などの発展技にも

挑戦してもらいたい。その意味において、親と子どもそれぞれに「マット」、「とび箱」、「鉄棒」に対してある程度の評価を得ていることは、親の期待とスポーツサークルの活動方針が合致していると言ってよいであろう。

また、スポーツサークルではスポーツ技能を高めることは当然ながら、子どもたちに対して「人間的にも成長する機会を提供したい」という思いをもっている。つまり、それは「人に対する礼儀、マナー」であったり、「あきらめずに頑張る姿勢」「運動を楽しみと感じる資質の育成」ということである。表4の「からだを動かすことを楽しむ」は、スポーツサークルの活動方針の「運動を楽しみと感じる資質」と同じであり、「人に対する礼儀やマナーを学ぶ」も同様である。これらの点に関しては、親の期待とスポーツサークルの意図、目的が合致していると考えられる。

一方、表4の「じょうぶで健康なからだになる」ことについては、親の期待が高いにも関わらずスポーツサークルの活動方針、指導者の意図としてあまり意識されていなかった。スポーツサークルでは器械運動を中心に練習することもあって、技能中心の指導に注力していた。しかし、今回のアンケート結果を受け、その点に対する親の期待も高いことから、今後の活動内

容に「健康なからだづくり」の要素も取り入れていく必要性が明らかとなった。

V. 結語と展望

本研究は、昨今のスポーツ活動に対する気運の高まりから、スポーツ系の習い事に通う子どもたちが多くなってきたことに着目し、本学のスポーツサークルの保護者を対象とした事例を取り上げ、「親が子どものスポーツ活動に対して期待すること」を明らかにした。

親の期待の傾向としては、子どもが技術的に上手になることよりも「運動に親しみ、楽しく体を動かす」ことのように生涯スポーツに繋がる要素が求められていた。また「人に対する礼儀やマナーを学ぶ」「自分の目標に向かって努力する」というように、社会性を育むこと、人間的に成長することへの期待が高いことが明らかとなった。

また、スポーツサークルに通い、実際に活動を体験している子どもが「良かった」と感じる活動内容と、子どもを通わせている親が「良かった」と感じる活動内容の順位が異なっていたことも明らかとなった。子どもが「何を求めて」スポーツ活動に参加しているのか、親が「何を求めて」子どもをスポーツ活動に参加させているのか、この両者の思惑に違いが見られた点についても今後の研究に活かして行くべき資料となるだろう。

そして、最後には、アンケート調査によって明らかになった内容とスポーツサークルの活動方針、指導目的、意図が合致するのかどうかを考察した。その結果、スポーツサークルの活動方針と親の期待に大きな違いは見られなかったが、親が期待することの順序性に多少の違いが見られた点から、今後の活動に向けて改善していく必要性も明らかとなった。

子どもがスポーツ活動に参加するにあたり、親の支援、援助は必要不可欠な要素である。そのため、本研究のように親の期待とスポーツ活動を提供する側の意図が一致しているかどうかを考察した研究は今後のスポーツ活動を推進していく上で貴重な資料となると考えられる。本研究によって明らかになった内容が、より一層のスポーツ活動の普及に役立てば幸いである。

注記

本研究に関する本文の執筆は小倉が行った。そのため、本文中の「筆者」とは小倉を指す。また、本研究

の対象となった「IPUスポーツサークル」では筆者と体育学部体育学科の長谷川晃一氏が指導者として関わっており、子どもたちへの指導は両者の共同作業によって行われた。そして、本研究におけるアンケートの作成ならびにデータ集計・分析については体育学部健康科学科の早田剛氏のアドバイスによって進められた。

文献

- ベネッセ教育総合研究所 (2007)：第3回子育て生活基本調査
- ベネッセ教育総合研究所 (2007)：第4回学習指導基本調査
- ベネッセ教育総合研究所 (2009)：第1回学校外教育活動に関する調査2009
- ベネッセ教育総合研究所 (2013)：第2回学校外教育活動に関する調査2013
- ベネッセ教育総合研究所 (2015)：第5回学習基本調査報告書
- 波多野義郎・山田俊大・久下浩史・藤川秋子 (2006)：親の意識は子どもの健康体力関連行動意識にどう関与するか，九州保健福祉大学研究紀要第7号，47-51
- 小松幸円・嶋谷誠司・山下昭子・池田尹雄 (1992)：子どものスポーツクラブに対する母親の意識について：横浜のサッカークラブの調査から，日本体育学会大会第43号，152
- 三木四郎・加藤澤男・本村清人 (2006)：中・高校器械運動の授業づくり，大修館書店
- 文部科学省 (2008)：小学校学習指導要領解説 体育編，文部科学省
- 岡田明・岸本肇 (1977)：スポーツ教室に通っている児童の実態について－「親への意識調査」をもとにして－，日本体育学会大会第28号，127
- 渡辺泰弘・松本耕二・高橋季絵 (2014)：児童のスポーツ習慣形成に関する親の影響（子ども・青少年スポーツの振興に関する研究），SSFスポーツ政策研究第3巻1号，335-342